東大水泳部河童踊り

Kappa dance of University of Tokyo swimming club

1K10C200-1　佐藤　悠
主査　寒川 恒夫 先生　　副査　奥野　景介 先生

【目的】

東京大学と言えば、日本が誇る最高学府であり、その歴史、伝統は深い。そんな東京大学の体育会水泳部が、毎年駒場キャンパスで行われる「駒場祭」にて「河童踊り」を披露している。１１月という寒い時期に、男子部員は上裸、女子部員もＴシャツで、腰にお手製の蓑を巻き、頭には皿をつけ、甲羅をかつぎ、くちばしをつけ、まさに河童のような格好をしてキャンパス内を練り歩く。部員が時間を掛けて作る大きな河童のハリボテを担ぎながら歩き、所々止まってはハリボテを囲み、大きな声で唄いながら独特のステップを踏む。最終的には、河童に扮した水泳部員たちが巨大なハリボテを蹴り飛ばし、河童踊りは幕を閉じる。

河童という目撃情報は多いが未だ想像の域を出ない生物をテーマに、東京大学水泳部の歴史を辿るとともに、各地の祭りとして行われている河童踊りと比較して、東京大学水泳部の河童踊りはどのような特徴があるのか、どのような変遷を辿ってきたのかということを調査する。

河童は存在自体が未確定なものであるが、その歴史は深く、時代によって河童の存在は人々にどのように捉えられているのかを時代を追ってまとめていく。

【方法】

東京大学水泳部の部誌である「さぎ利」を参考に東京大学水泳部と河童踊りの歩みを調査する。同時に、今年も河童踊りをやった東京大学水泳部の現役部員にインタビューをすることで、現在の河童踊りは水泳部にとってどのような意義を持つのかを調査する。

同時に、日本各地で行われている河童踊りの目的や歴史に触れる事で、河童踊りはその地でどのような意義を持つのか。また、河童はどのような存在として捉えられているのかというのを調査する。

【結果】

東京大学水泳部が誕生して間もなく河童踊りは誕生したが、その経緯は特に劇的なものがあった訳ではなく、軽く出し物をしようといったようないわゆる勢いのようなもので作られた事が分かった。しかしながら、歌詞の内容には当時の部員の強い想いが入れられたりと、その時々の河童踊りのスタイルは当時の水泳部を反映していると言っても過言ではない事が分かった。

同時に、東京大学水泳部の河童踊りは、現役部員と OB たちとの関係をつなげる役目も果たしている事が分かった。現役時代、振り付けや歌などかなり厳しく指導された事によって、卒業しても河童踊りへの想いは強くなっているようだ。

対して、各地で行われている祭りとしての河童踊りをみてみると、そこでの河童は「無病息災」「地域の守り神」「豊穣を祈る」といったような一種神のような存在として祭られていることが分かった。

また、河童自体にフォーカスを当てても現在、イラストとして多くの河童が描かれているが、昔はよりリアルに描かれており、実際の河から出てきそうであり、人を引きずり込むと言われても納得できる。それに対し現代では、可愛らしさを前面に出した容姿をしており、町のイメージキャラクターにもなっていることから、少なからず時代によって人々が河童に抱くイメージというのは変化しているということが分かる。

【考察】

これらを考えると、東京大学水泳部の河童踊りは、単に歴史と伝統があるというだけではなく、当時の先輩方の想いを現代に受け継いでいる文化そのものであり、厳しい指導などもあると言う点で、非常に体育会チックなものであると言える。

これは、善し悪しという問題ではなく、その地、その文化などによって河童のとらわれ方は大きく異なるということを表している。この河童へ対するイメージの豊富さは、河童の存在自体がまだまだ曖昧であることを非常に分かりやすく表していると言える。